

慶良間列島の爬虫・両生類相

太田 英利
増永 元

琉球大学熱帯生物圏研究センター

Herpetofauna of the Kerama Islands, Ryukyu Archipelago, Japan

H. Ota · G. Masunaga

慶良間列島は沖縄島の西約30-40kmに位置する島嶼群で、座間味島、阿嘉島、慶留間島、外地島（以上、座間味村）、渡嘉敷島（渡嘉敷村）などの有人島と、屋嘉比島、久場島（いずれも座間味村）をはじめとする大小15あまりの無人島から構成されている。これらの島々を隔てる海峡は最終氷期における海面低下の推定値（80-120m: Ota et al. 1993; Motokawa and Hikida 2003）よりもはるかに浅く、したがって慶良間列島は今からたかだか1.5-2万年前にはひとつの陸塊であったのは確実と考えられる（太田・伊澤 1996）。

琉球の爬虫・両生類の研究史において慶良間列島がとりわけ注目される存在となったのはHallowell (1861)の手による先駆的論文の出版がきっかけで、彼は1854-55年に琉球を訪れたロジャース提督（John Rogers）率いる米国の調査・測量隊によって持ち帰られた慶良間列島（Hallowell 1861中の呼称“Amakarima Island”：後にSteiniger 1907が“Kerama-shima”と特定）産標本にもとづき、キノボリトカゲ（原名：*Diploderma polygonatum*）やハブ（原名：*Bothrops flavoviridis*）などを新種として記載している。いっぽう新しいところでは、当山（1983, 1984）がそれぞれ座間味村と渡嘉敷島の陸生爬虫類と両生類について包括的なまとめを行っているが、それ以後も外来種を中心に新たな分布種の追加や分類学的研究の進展にもなう内訳の変更が行われている。さらに当山（1983）も懸念しているように、座間味村側における外来性の捕食者であるニホンイタチによる被害が爬虫・両生類相に及ぼす影響も、ひき続き注視されることが望まれる。

以上のようなことを念頭にここでいま一度、慶良間列島の中の主要6島（座間味島、阿嘉島、慶留間島、屋嘉比島、久場島、渡嘉敷島）における爬虫・両生類相を、現時点までに得られた知見を総合することで概観し、その生物学的意義と保全上の課題に

ついて考えてみたい。

●陸生爬虫類

慶良間列島の5島嶼からこれまでに記録されている爬虫・両生類を記録の根拠ともども表1に示す。陸生爬虫類としては21種・亜種が挙げられ、うち少なくとも16種・亜種が在来と考えられる。当山（1983, 1984）以降の変更としてはヤエヤマシガメ、オガサワラヤモリ、バーバートカゲ、アマミタカチホヘビの新たな追加、ヤモリ属（*Gekko*）集団やハイなどの分類学的取扱いの変更、同諸島内の島嶼レベルでの確認記録の追加などがある。

慶良間列島から新たに報告された4種のうちヤエヤマシガメとオガサワラヤモリについては、近年の人為的な持ち込みに由来することと、記録された島々ではすでに繁殖集団として定着していることが考えられる（矢部・服田 1996; Ota 1999）。ただオガサワラヤモリについては人のほとんど通わない2無人島（屋嘉比島と久場島）からも見つかることから移入の時期がより古いことも考えられる。ちなみにこのほかホオグロヤモリ、オンナダケヤモリ、ブラーミニメクラヘビの3種は、最近ではないにせよ人間の活動に伴って外部より慶良間列島に持ち込まれた外来種の可能性が高い（Lever 2003）。いっぽうバーバートカゲとアマミタカチホヘビについてはいずれも照葉樹林の発達した島だけから知られる中琉球の遺存固有種であり（Ota 1998）、渡嘉敷島の集団は在来と考えられる。このうちアマミタカチホヘビについては渡嘉敷島から採集された唯一の標本で体鱗が21列しかなく、通常23列の体鱗をもつ沖縄諸島や奄美諸島の他の集団から分化している可能性も考えられる（Ota and Toyama 1989）。

分類学的な変更を伴うものとしては、当山（1983, 1984）の時点ではニホンヤモリとみなされていた慶良間列島のヤモリ属（*Gekko*）集団が、その後、

琉球列島中・南部の他の島嶼集団ともども別種ミナミヤモリとして再認識された (Ota 1989)。ちなみに最近になって沖縄諸島のうち久米島、渡名喜島、沖縄島、伊平屋島、伊是名島からは、ミナミヤモリと形態的には判別が困難な反面、生殖的には完全に独立した隠蔽種が存在が示されているが、今のところこのような隠蔽種は慶良間列島からは見つからない (Toda et al. 2001)。またハイは近年行われた研究によって狭義のハイと別亜種クメジマハイに分割され (Ota et al. 1999)、さらに属名も *Calliophis* ないし *Hemibungarus* から *Sinomicrourus* に変更された (Slowinski et al. 2001)。ただし慶良間列島のハイ (広義) 集団のうち屋嘉比島と久場島のものについては一切標本が実見されておらず、生息や分類学的地位の再確認が強く望まれる。

慶良間列島内のレベルで新たに分布する島嶼が確認されたもののうちとりわけ注目に値するのは、慶良間列島内では長く渡嘉敷島だけから知られ、最近になって慶留間島にも生息することが確認されたリュウキュウヤマガメで (太田・濱口 2003; 渡辺 印刷中)、その在来性や生息状況に関する詳しい調査が望まれる。

●海生爬虫類

海生爬虫類のうちウミガメ類では、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種が慶良間列島の浜で産卵することが知られている (表1)。これまでの記録を見る限り産卵頻度はアオウミガメが圧倒的に高く、続いてアカウミガメ、タイマイの順となっている (平手・太田 1996; 菅沼 2002)。このような状況はアカウミガメの産卵が圧倒的に多く、それにアオウミガメ、タイマイが続く沖縄島や周辺離島の場合 (Kikukawa et al. 1998) とは対照的である。なおウミガメ類としては、このほかヒメウミガメ *Lepidochelys olivacea* について漂着例が報告されているが (亀崎ほか 1995)、産卵の記録はない。

ウミヘビ類についてはイイジマウミヘビ、クロガシラウミヘビ、ヒロオウミヘビの3種が、慶良間列島周辺の浅海域から確認されている。ただしこのうち卵生のヒロオウミヘビについては慶良間列島内で

の産卵がまったく確認されておらず、目撃される頻度も低いことから (増永 未公表資料)、繁殖集団として定着しているかどうかは疑問で、組織的な調査にもとづく確認が必要である。イイジマウミヘビとクロガシラウミヘビ (いずれも胎生) は座間味島や阿嘉島などの周辺の浅海で高い頻度で目撃され (Masunaga and Ota 2003; Masunaga et al. 2003; 増永 未公表資料; 太田 未公表資料)、慶良間列島周辺の海域に繁殖集団が安定して生息していると考えられる。ただ特にイイジマウミヘビは場所により造礁サンゴの衰退に伴い生息密度が低下しており (増永 未公表資料)、その生息状況については今後注視していく必要がある。

●両生類

慶良間列島の両生類としてはこれまでに7種が知られているが (表1)、このうちウシガエルは北米原産の外来種である。在来の6種のうち沖縄諸島や奄美諸島の他の多くの島嶼でも比較的普通に見られるシリケンイモリ、ヒメアマガエル、リュウキュウカジカガエル、ヌマガエルの4種 (Ota 2000a) は、慶良間列島内でもここで扱った6島嶼のうち4ないし5島嶼で生息が確認されている。これに対し、慶良間列島外での分布が照葉樹林の発達した少数の島嶼に限られるイボイモリとホルストガエルは、バーバートカゲやアマミタカチホヘビと同様、列島内での分布は渡嘉敷島に限られている。

●考察

以上のように慶良間列島からは、これまでに陸生爬虫類21種・亜種、海生爬虫類6種、両生類7種が確認されている。そしてそのうちそれぞれ少なくとも16種・亜種、5種、6種が在来種としてこの島嶼群で繁殖していると考えられる。在来の陸生種について島嶼別に見ると、生息する種・亜種の数が最も多いのは渡嘉敷島で、クメジマハイを除くすべての種・亜種が分布している。またこのうちマダラトカゲモドキを除くすべてのものは沖縄島と共通するが (マダラトカゲモドキについては、沖縄島では基亜種 *Goniurosaurus kuroi* wae

*kuroiwae*と置換: Grismer et al. 1994)、アマミタカチホヘビについては渡嘉敷島の集団がそれ以外の沖縄諸島や奄美諸島の集団からある程度分化している可能性も考えられる(上記参照)。なお渡嘉敷島に在来分布する陸生爬虫類、両生類のそれぞれ4種、2種は現行の環境省のレッドリストに絶滅危惧種として掲載されており(環境省自然保護局野生生物課 2000)、その主要な生息環境である照葉樹林と周辺を流れる水系(Ota 2000b)の保存が強く望まれる。

座間味村側の島嶼である座間味島、阿嘉島、慶留間島、屋嘉比島、久場島からはあきらかに在来と思われる陸生爬虫類がそれぞれ9種、11種、10種、10種、7種、両生類は4種、4種、4種、2種、0種、記録されている。渡嘉敷島に比べて在来種数が少ないおもな理由は、リュウキュウヤマガメ(ただし慶留間島に由来不明の集団あり: 上記参照)、バーバートカゲ、アマミタカチホヘビ、イボイモリ、ホルストガエルなど慶良間列島外でも分布の限られた種の欠落にあり、座間味村側の島嶼ではこうした種の主要な生息環境である照葉樹林や水系(Ota 2000b)の発達が悪いためと考えられる。ただハブのようにより多様な環境で生存できる種が渡嘉敷島にいて座間味村側にいないことについては、これらの島々のすべてがごく最近(1.5-2万年前)1つの陸塊であったこと(上記参照)を考えると奇妙であり、たとえば餌の欠乏といった特別な原因による座間味村側島嶼からの集団の消滅、あるいはもともと慶良間のエリアにいなかったハブの人為的運搬や漂流による渡嘉敷島への侵入、といった最終氷期後の特別な出来事を想定せざるを得ない。こうしたシナリオの検証はきわめて困難であるが、化石や半化石の探索が何らかの証拠をもたらすことが期待される。

慶良間列島の最終氷期における古地理を考えたときにもう1つ奇妙なのがハイとクメジマハイの分布である。これらを分割した研究において検討された慶良間列島産の標本はごくわずかであり(Ota et al. 1999)、より多くの標本に基づき系統的視点に立った各島嶼集団の見直しが、まず何よりも望まれる。

座間味村側の島嶼のうち座間味島、阿嘉島、慶留

間島では近年の調査でトカゲ類の1部やヘビ類がほとんど観察されない。たとえば若齢時の青い尾が目をはくオキナワトカゲは、1960年頃までは上記各島に高密度で生息していたらしいが(当山 1983; 太田 聞き込みにもとづく未公表資料)、ここ20年余り座間味島ではまったく確認されておらず(当山 1983; 沖縄県環境保健部自然保護課 1996)、阿嘉島と慶留間島でも目撃される頻度は高くない(宮城・三井 1981; 当山 1983; 太田 未公表資料)。このような状況はアカマタなどのヘビ類についても同様である(当山 1983; 太田 未公表資料)。原因としては従来から、1950年代なかばにネズミの駆除を目的として導入されこれらの島々に定着したニホンイタチ(伊波 1966; Uchida 1969)による捕食圧の可能性が指摘されている(宮城・三井 1981; 当山 1983; 沖縄県環境保健部自然保護課 1996)。同じ座間味村側の島嶼でもニホンイタチの定着しなかった屋嘉比島や久場島では現在でもオキナワトカゲやアカマタなどが高頻度で目撃され(Mori et al. 1999; 太田・森 2000)、このことは上記の予想を強く支持している。ニホンイタチの存在は座間味島などにおけるウミガメ類の繁殖成功率にも深刻な影響を与えていると考えられる(福永 1999)。このような状況に鑑み、現在定着している島嶼からのニホンイタチの除去、定着していない島嶼への移入の防止といった対策にむけた責任ある対応が行政に強く望まれる。

●謝辞

ここで言及されている未公表資料の多くは、筆者らがこれまでに慶良間列島で行なってきた調査研究から得られたものである。その過程では亀崎直樹、森 哲、平手康市、戸田 守、菊川 章の諸氏をはじめ多くの共同研究者・調査協力者にご助力頂いた。阿嘉島臨海研究所スタッフの皆様には特に離島に渡る際、いろいろと無理をきいて頂いた。座間味村、渡嘉敷村の住民の方々には聞き込みを通して貴重な情報をご提供頂いた。以上の皆様に厚く感謝致します。

● 引用文献

- 千木良芳範 1978. 阿嘉島・屋嘉比島及び久場島の両生・爬虫類. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集. ケラマジカ実態調査報告書 III. 沖縄県教育委員会, 那覇. p. 157-162.
- 福永純子 1999. イタチによるウミガメ産卵巣食害についての報告. うみがめニュースレター, (42): 3-4.
- Grismer, L. L., H. Ota and S. Tanaka 1994. Phylogeny, classification, and biogeography of *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae) from the central Ryukyus, Japan, with a description of a new subspecies. Zool. Sci., 11: 319-335.
- Hallowell, E. 1861. Report upon the Reptilia of the North Pacific Exploring Expedition, under command of Capt. John Rogers, U. S. N. Proc. Acad. Nat. Sci., Philadelphia, 12: 480-509.
- 平手康市・太田英利. 1996. 屋嘉比島における産卵状況. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第36集. ウミガメ類生息実態調査報告書 | 沖縄諸島及び周辺離島における調査結果. 沖縄県教育委員会, 那覇, p. 29-36.
- 平手康市・下池和幸 1995. 慶良間列島阿嘉島において確認したタイマイ *Eretmochelys imbricata* (Linnaeus) の産卵. 沖縄生物学会誌, (33): 61-63.
- 伊波興清 1966. 野鼠の天敵としてのイタチの導入記録. 沖縄農業, 5(2): 45-53.
- 環境省自然保護局野生生物課(編) 2000. 改訂版日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-. 自然環境研究センター, 東京. 120pp.
- 亀崎直樹・大牟田一美・大牟田幸久・佐藤文宏・谷崎樹生・宮平秀幸・福永純子 1995. 南西諸島におけるヒメウミガメの漂着3例. うみがめニュースレター, (24): 6.
- Kikukawa, A., N. Kamezaki and H. Ota 1998. Current status of the sea turtles nesting on Okinawajima and adjacent islands of the central Ryukyus, Japan. Biol. Conserv., 87: 149-153.
- Lever, C. 2003. Naturalized Reptiles and Amphibians of the World. Oxford University Press, Oxford, 318pp.
- Masunaga, G. and H. Ota 2003. Growth and reproduction of the sea snake, *Emydocephalus ijimae*, in the central Ryukyus, Japan: a mark and recapture study. Zool. Sci., 20: 461-470.
- Masunaga, G., R. Matsuura, T. Yoshino and H. Ota 2003. Reproductive biology of the viviparous sea snake, *Emydocephalus ijimae* (Reptilia: Elapidae: Hydrophiinae), under a seasonal environment in the Northern Hemisphere. Herpetol. J., 13 in press.
- 宮城邦治・三井興治 1981. 慶留間島の陸上脊椎動物相. 沖縄生物学会誌, (19): 53-56.
- Mori, A., H. Ota, and N. Kamezaki 1999. Foraging on seaturtle nesting beaches: flexible foraging tactics by *Dinodon semicarinatum* (Serpentes: Colubridae). In: H. Ota (ed.), Tropical Island Herpetofauna: Origin, Current Diversity, and Conservation. Elsevier Science, Amsterdam, p. 99-128.
- Motokawa, J. and T. Hikida 2003. Genetic variation and differentiation in the Japanese five-lined skink, *Eumeces latiscutatus* (Reptilia: Squamata). Zool. Sci., 20: 97-106.
- 沖縄県環境保健部自然保護課(編) 1996. 沖縄県の絶滅の恐れのある野生生物-レッドデータおきなわ-. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇. p. 341.
- Ota, H. 1989. A review of the geckos (Lacertilia: Reptilia) of the Ryukyu Archipelago and Taiwan. In: M. Matsui, T. Hikida and R. C. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia. Herpetological Society of Japan, Kyoto, p. 222-261.
- Ota, H. 1998. Geographic patterns of endemism and speciation in amphibians and reptiles of the Ryukyu Archipelago, Japan, with special reference to their paleogeographical implications. Res. Popul. Ecol., 40: 189-204.
- Ota, H. 1999. Introduced amphibians and reptiles of the Ryukyu Archipelago, Japan. In: G. Rodda, Y. Sawai, D. Chiszar and H. Tanaka (eds.), Problem Snake Management: The Habu and the Brown Treesnake. Cornell University Press, Ithaca, p. 439-452.
- Ota, H. 2000a. The current geographic faunal pattern of reptiles and amphibians of the Ryukyu Archipelago and adjacent regions. Tropics, 10: 51-62.
- Ota, H. 2000b. Current status of the threatened amphibians and reptiles of Japan. Popul. Ecol., 42: 5-9.
- 太田英利・濱口寿夫(編) 2003. 沖縄県天然記念物調査シリーズ41集. リュウキュウヤマガメ・セマルハコガメ生息実態調査報告書. 沖縄県教育委員会, 那覇. p. 5.
- 太田英利・伊澤雅子(編) 1996. シンポジウム: 屋嘉比島を中心とした慶良間列島の動物相とその保全. 沖縄島嶼研究, (14): 1-22.
- 太田英利・森 哲 1993. オガサワラヤモリの阿嘉島からの記録. Akamata, (9): 24-26.
- 太田英利・森 哲 2000. カメを食うヘビ: 慶良間列島, 屋嘉比島のアカマタ. みどりいし, (11): 5-7.
- Ota, H. and M. Toyama. 1989. Taxonomic re-definition of *Achalinus formosanus* Boulenger (Xenodermiinae: Colubridae), with description of a new subspecies. Copeia, 1989: 597-602.
- 太田英利・疋田努・当山昌直 1991. 沖縄諸島・渡嘉敷島からのパーバートカゲの記録. Akamata, (7): 9-10.
- Ota, H., A. Ito and J. T. Lin 1999. Systematic review of the elapid snakes allied to *Hembungarus japonicus* (Günther, 1868) in the East Asian Islands, with description of a new subspecies from the central Ryukyus. J. Herpetol., 33: 675-687.
- Ota, H., N. Sakaguchi, S. Ikehara and T. Hikida. 1993. The herpetofauna of the Senkaku Group, Ryukyu Archipelago. Pacific Sci., 47: 248-255.
- Slowinski, J. B., J. Boundy and R. Lawson 2001. The phylogenetic relationships of Asian coral snakes

-
- (Elapidae: *Calliophis* and *Maticora*) based on morphological and molecular characters. *Herpetologica*, 57: 233-245.
- Stejneger, L. 1907. Herpetology of Japan and adjacent territory. *Bull. U.S. Nat. Mus.*, 58: 1-557.
- 菅沼弘行 2002. 浅海域生態系調査 (ウミガメ調査) 報告書. 環境省自然保護局生物多様性センター, 富士吉田, 383pp.
- 高良鉄夫 1962. 琉球列島における陸棲蛇類の研究. 琉球大学農家政工学部学術報告, (9): 1-202, 22 pls.
- 竹中踐 1987. 渡嘉敷島におけるアマミタカチホヘビの記録. 両生爬虫類研究会誌 (35): 9-10.
- Toda, M., T. Hikida and H. Ota 2001. Discovery of sympatric cryptic species within *Gekko hokouensis* (Gekkonidae: Squamata) from the Okinawa islands, Japan, by use of allozyme data. *Zool. Scripta*, 31: 1-11.
- 当山昌直 1983. 沖縄群島の両生爬虫類相 (II) 座間味村の両生爬虫類. 沖縄県立博物館 (編), 沖縄県立博物館総合調査報告書 III 座間味村. 沖縄県立博物館, 那覇, p. 16-22.
- 当山昌直 1984. 沖縄群島の両生爬虫類相 (III) 渡嘉敷島・久米島. 沖縄県立博物館紀要 (10): 24-36.
- 当山昌直 1995. ミナミイシガメの座間味島からの記録. *Akamata*, (12): 5.
- 当山昌直・城間仁・佐藤文保 1983. ホルストガエルの渡嘉敷島からの記録. *Akamata*, (1): 3.
- Uchida, T. A. 1969. Rat-control procedures on the Pacific islands, with special reference to the efficiency of biological control agents. II. *J. Fac. Agr., Kyushu Univ.*, 15: 355-385.
- 渡辺伸一 慶良間列島慶留間島からのリュウキュウヤマガメの新記録. *Akamata*. 印刷中.
- 矢部隆・服田昌之 1996. 慶良間列島阿嘉島に帰化したミナミイシガメについて. *みどりいし*, (7): 25-27.
- Yamashiro, S., M. Toda and H. Ota 2000. Clonal composition of the parthenogenetic gecko, *Lepidodactylus lugubris*, at the northernmost extremity of its range. *Zool. Sci.*, 17: 1013-1020.
- 安川雄一郎・木村匡. 1995. 阿嘉島のミナミイシガメについて. *Akamata*, (12): 3-4.
- Yasukawa, Y., H. Ota and J. B. Iverson 1996. Geographic variation and sexual size dimorphism in *Mauremus mutica* (Cantor, 1842) (Reptilia: Bataguridae), with description of a new subspecies from the southern Ryukyus, Japan. *Zool. Sci.*, 13: 303-317.

表 1. 慶良間列島の各島から記録されている爬虫・両生類

ウミガメ類については上陸・産卵の記録、ウミヘビ類については沿岸の浅海での発見を示す。記録の根拠: CY, 千木良 (1978); HO, 平手・太田 (1996); HS, 平手・下池 (1995); MM, 宮城・三井 (1981); MMYO, Masunaga et al. (2003); MO, Masunaga and Ota (2003); MOK, Mori et al. (1999); MUD, 増永 (未公表資料); OHT, 太田ほか (1991); OH, 太田・濱口 (2003); OUD, 太田 (未公表資料); OIL, Ota et al. (1999); OM, 太田・森 (1993); SH, 菅沼 (2002); TM-II, 当山 (1983); TM-II I, 当山 (1984); TM-V, 当山 (1995); TS, 竹中 (1987); TSS, 当山ほか (1983); TT, 高良 (1962); WS, 渡辺 (2002); YK, 安川・木村 (1995); YOI, Yasukawa et al. (1996); YTO, Yamashiro et al. (2000).

種名	座間味	阿嘉	慶留間	屋嘉比	久場	渡嘉敷
爬虫類						
リュウキュウヤマガメ*R <i>Geoemyda spengleri</i>			WS, OH*1?			TM-III
ヤエヤマシシガメ*1 <i>Mauremys mutica kami</i>	TM-V, YOI	YK, YOI				
アオウミガメ*R <i>Chelonia mydas</i>	SH			HO	MOK*2	
アカウミガメ*R <i>Caretta caretta</i>	SH	SH		HO	MOK*2	
タイマイ*R <i>Eretmochelys imbricata</i>	HS, SH	HS				
ミナミヤモリ*3 <i>Gekko hokouensis</i>	TM-II	TM-II	MM, TM-II	CY, OUD	TM-II, OUD	TM-III
ホオグロヤモリ*1 <i>Hemidactylus frenatus</i>	TM-II	TM-II	MM, TM-II	CY	CY	TM-III
オンナダケヤモリ*1? <i>Gehyra mutilata</i>		TM-II				TM-III
オガサワラヤモリ*1 <i>Lepidodactylus lugubris</i>	YTO	OM		YTO	OUD	
マダラトカゲモドキ*R <i>Goniurosaurus kuroiwae orientalis</i>		TM-II				TM-III
オキナワキノボリトカゲ*R <i>Japalura p. polygonata</i>	TM-II, OUD	TM-II, OUD	MM, TM-II, OUD	CY, OUD	TM-II	TM-III
オキナワトカゲ <i>Eumeces m. marginatus</i>		TM-II	MM	CY, OUD		TM-III
バーバートカゲ*R <i>E. barbouri</i>						OHT
ヘリグロヒメトカゲ <i>Ateuchosaurus pellopleurus</i>	TM-II	TM-II	MM, TM-II	TM-II, OUD	TM-II	TM-III
アオカナヘビ <i>Takydromus smaragdinus</i>	TM-II	TM-II	MM, TM-II	TM-II, OUD	TM-II	TM-III
ブラーミニメクラヘビ*1? <i>Ramphotyphlops braminus</i>	TT	TT*4, OUD	TT*4, TM-II	TT*4, OUD	TT*4, OUD	TM-III
アマミタカチホヘビ <i>Achalinus wernerii</i>						TS
ガラスヒバア <i>Amphisema pryeri</i>	TT	TT*4	TT*4	CY, OUD	TT*4	TM-III
リュウキュウアオヘビ <i>Cyclophiops semicarinatus</i>	TT*4	TM-II	TT*4	TT*4, OUD	TT*4	TM-III
アカマタ <i>Dinodon semicarinatum</i>	TT	TT*4	TT*4	MOK	MOK	TM-III
ハイ <i>Sinomicrurus japonicus boettgeri</i>				TT*5	TT*5	OIL

種名	座間味	阿嘉	慶留間	屋嘉比	久場	渡嘉敷
爬虫類(つづき)						
クメジマハイ <i>S. j. takarai</i>	OIL	OIL	OIL			
イイジマウミヘビ <i>Emydocephalus ijimae</i>	MMYO, OUD	MO				OUD
クロガシラウミヘビ <i>Hydrophis melanocephalus</i>	MUD					
ヒロオウミヘビ <i>Laticauda laticaudata</i>	MUD*6					
ハブ <i>Trimeresurus flavoviridis</i>						TM-III
ヒメハブ <i>T. okinavensis</i>	TT	TM-II	TT	CY	TT*4	TM-III
両生類						
シリケンイモリ <i>Cynops ensicauda</i>	TM-II	TM-II	MM, TM-II			TM-III
イボイモリ*R <i>Echinotriton andersoni</i>						TM-III
ヒメアマガエル <i>Microhyla ornata</i>	TM-II	TM-II	MM, TM-II			TM-III
リュウキュウカジカ <i>Buergeria japonica</i>	TM-II	TM-II	MM, TM-II	CY, OUD		TM-III
ヌマガエル <i>Rana limnocharis</i>	TM-II	TM-II	TM-II	CY		TM-III
ウシガエル*1 <i>R. catesbeiana</i>						TM-III
ホルストガエル*R <i>R. holsti</i>						TSS

*1 人為的移入に由来.

*2 アカマタによる捕食を記録.

*3 千木良(1978)や当山(1983,1984)はニホンヤモリ(*G. japonicus*)として(Ota 1989 参照).

*4 分布域として挙げられているが標本は示されていない.

*5 高良(1962)は屋嘉比島と久場島にもハイが分布するとしているが、根拠となる標本は示されておらず、その実在性や分類学的地位(狭義のハイかそれともクメジマハイか: Ota et al. 1999)についてはさらなる確認が必要.

*6 確認はされているが列島内で繁殖しているかどうかは不明.

*R 絶滅危惧種として環境省の現行のレッドリストに掲載(環境省自然保護局野生生物課 2000; Ota 2000b).